



名護市立安和小学校
平成30年度 学校便り10号
平成30年9月13日
発行責任者 校長 宮城達也

読書の秋！ 本を読む習慣を身に付けよう！

◎ 中国・唐代の文人である韓愈（かんゆ）が残した詩の中に、「燈火（とうか）親しむべし」という一節があります。その意味は、「秋になると涼しさが気持ち良く感じられ、あかり（燈火）になじむようになる」。つまり、秋は読書に一番適した季節であるということを表したこの言葉が、読書の秋の由来とされています。

読書月間の今月、学校でも図書室を中心にいろいろな取組が実施され、子どもたちが読書の楽しさや大切さを知ることができるよう活動が工夫されています。

読書は、国語力を構成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるものです。読書習慣を身に付けることは、国語力（学力）を向上させるばかりでなく、一生の財産として生きる力にもなります。文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだり、図鑑や辞書を紐解くことも重要な読書活動です。

また、読書は子どもの豊かな心を育むという面においても大きな役割を果たしています。家庭で小さいうちから読み聞かせをしたり、ゆっくりと絵本を見たり、本を読む体験をすることがとても大切です。幼児期からゲームやテレビなどのメディア浸けにされている子どもと、読み聞かせで育った子どもとでは、情操面での発達に大きな違いが出てきます。

スマホ等の電子機器が普及し、「活字離れ」「読書離れ」が叫ばれていますが、これからの時代を考えると、読書の重要性が増すことはあっても減ることはないと考えます。情報化社会の進展は、自分でものを考えずに断片的な情報を受け取るだけの受け身の姿勢を子どもたちにもたらしやすいと思います。これからの先行き不透明な時代、自分でものを考え、判断し、行動する必要があるからこそ、読書が一層必要になるのであり、「自ら本に手を伸ばす子供を育てる」「読書習慣を身に付けさせる」ことが切実に求められています。

保護者の皆さま！子どもたちといっしょに読書（読み聞かせ）をする時間をつくったり、いっしょに本屋さんや図書館に出かけて、読書の楽しさと出逢うきっかけをつくってあげましょう。

（名護市にはりっぱな市立図書館もありますね！）
読書活動充実へのご協力よろしくお願ひします。



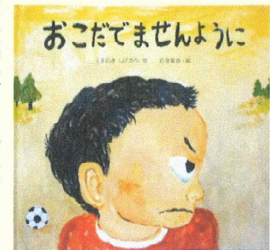
読書の秋特集！ おすすめの絵本を紹介します！

校長講話 = 読み聞かせ！

◎ 今月の校長講話の時間は、読書月間にちなんで、子どもたちに絵本の読み聞かせをしました。子どもたちに読書への興味関心が持てるお話ができないかと考え選んだ本は「**わすれもの大王**」です。「いつも先生から「わすれもの」を注意されているけんたくん。ある日、クラスみんなの発案で、わすれものをした子は点数がふえていく棒グラフをつくることに。するとけんたくんの棒グラフはどんどん伸び…。その後お話は意外な展開へ…」さてどうなるでしょう！
◎ 学校職員による読み聞かせの時間には、幼稚園へ出向いて「**おかえし**」という絵本を読み聞かせしました。「タヌキの家の隣に引越してきたキツネは、いちごを持ってあいさつにいきました。するとタヌキはおかえしに……。キツネとタヌキのおかえし合戦はどんどんエスカレートしていきます。」とんでもないおかえしのどんでんがえしがまっていますよ！ ぜひ読んでみて下さい！



◎ もう一冊は、くすのきしげのりさんの『**おこだでませんように**』という絵本を紹介します。いろいろな子育ての本を読んだり、お話を聞いたりして、何とか子どもの気持ちを理解して叱らずに…。と毎回思うのですが、現実に返ると、教師という立場でも、親という立場でもなかなかそうはいきません。「親や先生は子どもを何のために叱るのか…？」という立て前はあっても、大人でも叱られたり怒られたりすると、落ち込んだり、悲しい気持ちになってしまいます。叱ったほうも叱ったほうで、怒りの感情だけで怒ってしまったのではないかと反省したりもするものです。そんな時は、自戒の念も込めて、この絵本を読み返します。何度読んでも涙が出てくる大好きな絵本ですが、この本の作者あとがきにも感動・共感したので原文のまま掲載します。まだの方はどうぞお読みになって下さい。私たち大人がひとりでも多くの子どもの心の中にある、祈りのような思いに気づくことができますように！



「おこだでませんように」あとがき

『おこだでませんように』そう書かれた小さな短冊を見たとき、私は涙が出そうになりました。短冊を書いた男の子は、いつも怒られているのでしょ。この子が、楽しいと思ってしたことや、いいと思ってしたこと、やりすぎてしまったり、その場にそぐわなかったり、あるいは大人の都合に合わないからと、結果として怒られることになってしまうのかも知れません。でも、この子はだれよりもよくわかっているのです。自分は怒られてばかりいるということを。そして、思っているのです。自分が怒られるようなことをしなければ、そこには、きっとお母さんの笑顔があり、ほめてくれる先生や、仲間に入れてくれる友だちがいるのだと。
そんな思いをもちながら、それをお母さんや先生や友だちに言うのではなく、七夕さまの短冊に、一文字一文字けんめいに書いた『おこだでませんように』。この子にとって、それは、まさに天に向けての祈りの言葉なのです。
子どもたちひとりひとりに、その時々でゆれうごく心があります。そして、どの子の心の中にも、このお話の「ぼく」のような思いがあるのです。どうか、私たち大人こそが、とらわれのない素直なまなざしをもち、子どもたちの心の中にある祈りのような思いに気づくことができますように。